
レーゼの神

紅このは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レーゼの神

【Nコード】

N2773Q

【作者名】

紅このは

【あらすじ】

見覚えのある死体を見下ろした千歳は自分が死んだのだと理解し、天国なり冥界なりへ行くべきだろうか、と考えた。

「地上に未練がないのは良い事ですが、まだ成仏しないでくださいね。私が来た意味がないですから」

突然そう言ったのは自称地球の神の得体のしれない青年、璃寛。

成仏する方法もわからないため彼について行くと、そこは“空の神殿”^{ロアー・シエ}といういわゆる天上とか天界と呼ばれる場所だった。

そこで会ったのは最高神シャモア。

「新しい神になってほしい」

……はい？

「これは決定事項だ。君に拒否権はないよ」

突然レーゼと呼ばれる世界の神になった青年の、世界を安定させるための旅が始まる。

「神々の箱庭」シリーズの記念すべき第一作目です。

登場人物（前書き）

随時更新します。

登場人物

く神く

千歳
ちとせ

レーゼの神。神としての名はウイスタリア。略称ウイリア。神様顔負けの超絶美形。初対面の人には必ず女と間違えられるのと、どれだけ鍛えても筋肉がつかないのが悩み。が、鍛練の成果は出ているのでよくわからない体である。なぜか日焼けせず、健康的な白く美しい肌をしている。黒髪に銀の目。世界中の女性が羨む容姿だが、本人は迷惑している。元々体術はできたが、神になって不老不死の体と様々な力を手に入れた。死んだ時点では十五歳なのに、神の体になった時外見年齢が十八歳に代えられた。瞳の色も元々は灰色である。

璃寛
りかん

アーノスの神。神としての名はない。本人曰く“地球”は星の名で、正しくは“アーノス”。変身魔法が得意で、地球の神話に登場する神はほとんどコイツだったりする。薄茶色の襟元ほどの長さの髪に、淡い空色の髪。常に笑顔を絶やさず掴み所のない腹黒。アイドル顔負けの美形なのに印象に残らないという、変わった人（神？）。外見年齢は十九歳。

シャモア

最高神。全ての世界を管理する。金髪金目。基本的に空の神殿から出る事ができない。
ロアー・ジェ

くドラゴン

エルム

白い鱗を持つ雌竜。ドラゴンの誇りを何よりも大切にし、子供思いの最強ママ。光属性。

クロム

黒い鱗を持つ雄竜。すっかりエルムの尻にしかれている。闇属性。

ラピス

真名はラピスラズリ。濃い青の鱗をした雌竜。転生者。水属性。

カーマイン

真名はクリムゾン。濃い赤の鱗をした雄竜。転生者。火属性。

00:プロローグ(前書き)

誤字脱字の指摘、感想などは大歓迎です。
拙い文章ですが、よろしくお願いします。

00：プロローグ

気が付けば、俺は自分を見下ろしていた。

崩れた壁や天井、倒れた棚やテレビなど様々な物が散乱している。そんな中で俺が見ているのは、青白い腕。顔は見えないのに、妙な確信があった。

あれは自分なのだと。

おそらく、自分は死んだのだろう。震度七もありそうな大きな地震だった。古い建物だし、耐えられなかったらしい。

死んだのなら天国なり冥界なりへ行くべきだと思うが、どうやって行くのだろう。

「地上に未練がないのは良い事ですが、まだ成仏しないでくださいね。私が来た意味がないですから」

いきなりかけられた声に驚き、俺は顔を上げた。

薄茶色の髪に空色の瞳。俺よりも四歳ほど上だろうか。優しいな風貌だが、掴み所のない印象に感じた。特別引き付ける何かがあるわけではない。しかし、そこのアイドルなど目じゃないほど整っているのに印象に残らないような、変わった美青年であった。

「初めまして、千歳^{ちとせ}さん。私の事は璃寛^{りかん}と呼んでください」

そう言っ、璃寛は軽くお辞儀をする。

「ええーつと、璃寛さん？状況がよくわからないのですが」

言いながら、俺の頭はフル回転していた。

なぜ、この人には霊体であるはずの自分が見えているのか。璃寛も“成仏するな”と言っていたし、自分が死んだのは間違いない。それに、何のために来たのだろうか。

璃寛は俺をみてくすりと笑った。

「まあ、混乱するのも無理ないですね。私は地球の神をさせてもらっています。だから、貴方が見えるのですよ」

「……は？神？」

思わず素で聞いてしまった。慌てて敬語に直す。

「あの……どうい事でしょうか」

その質問には答えず、璃寛はのんびりと言った。

「敬語はいいですよ。使いにくいでしょう」

確かに妙に使いにくいのだが、神というのが本当ならいいのだろうか。相手も敬語だし。

「私はこれが自然体ですから。神の前では嘘がつけなくなっているのですよ。演技もそうです」

なるほど。敬語は演技というほどではないが、自然体でもない。だから疲れるのか。

……というか、さっきから何気に心読んでますよね。

「嘘をつけなくても人を偽る事はできますから、念のためです」

さいですか。

じゃあ、遠慮なく。

「俺に何の用？」

誰かと演技抜きで話すのは久しぶりだ。俺は無意識に目を細めた。

「色々と疲れていたようですね」

「まあ……ちよつとは」

曖昧に返したが、璃寛にはわかっているだろう。とはいえ、本題はそれではない。

「私達は……こう言つと失礼ですが、貴方が死ぬのを待っていたんです」

「俺が死ぬのを？」

気分のいい話ではないが、意図的に殺そうとするよりはマシだ。

……してないよな？

「もちろんしてませんよ。これからたくさん迷惑をかけるんですから」

何だろう。嫌な予感がする。死んでやっとな解放されると思っていたのに、璃寛の顔が怖い。

「詳しい話行ってからしましょう。あまり時間がないのです。さあ」

差し出された手におずおずと手を伸ばし、触れた瞬間、俺達の体は跡形もなく消えたのだった。

01：空の神殿

小説や漫画、ゲームにはよくあるが、まさか自分が体験するとは夢にも思わなかった瞬間移動に、俺は目を丸くした。

「神は全ての世界の能力を使えますからね」

と、璃寛が意味のわからない事を言っている。

「ここが我々の住む神殿です。天国とも天上とも天界とも呼ばれています、我々は“空の神殿”と呼んでいます」

「それって古代語か何か？」

「はい。今はほとんど使われていませんが。地球でも大昔は使っていたんですよ。貴方もすぐ理解できるようになります」

意味深な笑みを浮かべる璃寛に、これ以上は聞かないでおこう、と俺は思った。

璃寛には筒抜けだが。

「さて、こんな所で立ち話も何ですし、行きましようか。霊体では天界に一時間といられませんから、急ぎなのですよ」

ちなみに、下手に肉体を持っている方が耐えられないのだと言う。霊体は魂だけの存在であり、より神に近いから。俺が死ぬのを待っていたのは、ここへ連れて来るためだろう。

それでも、耐えられるのは一時間。

璃寛は長い廊下を歩き、大きな扉の前で立ち止まる。

装飾が少なく質素で、ただ大きいだけに異様な存在感を発揮しているそれを手も触れずに開けた。

中もやはり質素で、“偉い人のいる所”豪華な城”というイメージは払拭された。

そういえば、“神殿”だと言っていた気がする。それでも意外な感じだ。

「連れて来ましたよー」

少々場違いな声を発した璃寛は、俺に入るよう促した。

「ああ、ありがとう」

金の髪と瞳をした可愛らしい少年は、にっこりと笑った。年は十歳くらいだろうか。と思ったが、相手は神であるので全く当てにな

らない。

そう。彼こそが全世界における最高神であつた。

俺は彼の圧倒的な力の気配に絶句した。

「君が千歳だよな」

「……そうだ」

我に返つた俺が返すと、神は嬉しそうに笑つた。

「僕はシャモアだ。君は普通に話してくれるんだね」

そう言われて敬語を使っていない事に気が付くが、神の前では使えないのではないのだろうか。

「そうじゃなくて、大抵の人は声が出なくなるんだよ」

……威圧感で？

まあ、わからなくもない。俺だって、全く平気というわけではないのだ。多少の息苦しさはある。

「多少で済むのがすごいんだよ。まだ人間の魂なのに」

まだ？

「日本に生まれた君なら理解はできると思うけど、どんな生き物であれ死んだら魂だけの存在になる。今の君がその状態で、この時点

では肉体を持たない事以外生前と何ら変わりはない。マンガにあるように、物をすり抜けたりもできないよ」

マンガって……神様もマンガを読んだりするのだろうか。

「読むよ。あれ、おもしろいよね」

へえ、意外。でもここは娯楽が少なそうだし、おかしくはないか。

……なんか神様と話しているとしゃべる事を忘れそうだ。

「で、その魂達は“ライン・ヴァルト・ノース始まりと終わりの地”　つまり冥界へ行く。そこで魂をきれいにして、また別の生き物へ生まれ変わるんだ。輪廻転生ってヤツだね」

「魂をきれいにするって、記憶を消したりするののか？」

俺は変なクセがつかないよう、わざと声に出して言った。

「んー……まあ、正確には少し違うんだけど、そんなものかな。ただ、君は数少ない例外だよ」

例外……？ “ライン・ヴァルト・ノース始まりと終わりの地” とやらに行かなかったからか？

「それもちょっと違うかな。僕達がここへ呼んだんだし」

呼んだって、璃寛が迎えに来た事か。

「ええ。普通なら、貴方達が会えるのは冥界の神くらいのもんですよ。私達が特定の誰かに姿を見せる事など滅多にありません」

ふん……。

「それで、俺に何の用？」

面倒事ならお断りだ。

「ふふ、君は面白いね。どうして僕らは個性的な人ばかりなのかなあ」

むう……よくわからん。

「ま、時間もそんなにないし、本題かな。君を呼んだ理由、それは仲間になっしてほしいからだよ」

それは同志的な意味で？それとも……。

「神様になるって事だよ」

はあ？ものすごく面倒事の臭いがぷんぷんするんですけど。

「まずは、神とは何かを説明しないとならないね」

無視ですか？

「貴方に拒否権はありませんから、悪しからず」

……もつとつにでもなれ！

シャモアや璃寛の話では、神というのは生まれながらのものではないらしい。最高神であるシャモアと双子の弟である冥界の神は別だ。

よくある神話のように、世界は神が創っているわけではない。自然にできるのだそう。その管理するのがシャモア。間違つて滅びる事のないようにという、監視のようなものだ。

勘違いのないように言うが、神は万能ではない。生き物を滅ぼす事はできても、創る事はできない。世界及び生き物はあくまで自然に“生まれる”ものだ。もしかするとシャモアの上に神様みたいな生命体がいるのかもしれないが、少なくともシャモア達に死んだ者を生き返らせる事などできなかった。

といつても、転生は別である。同じ生き物として生き返らせる事ができない、という意味だ。

ただ、世界はたくさんあつて、シャモア一人では管理しきれなかった。そのせいなのか、世界が荒れ始める。

そこで、荒れた世界を安定させるために別の管理者を創らなければならなかった。

しかし、くどいようだが、シャモアに神を創る事などできない。

だから、既に生きている者を神として創り変える、という方法をとった。それが璃寛のような各世界の神々である。

「……ってことは、璃寛は元々別世界の生き物？」

人間と言わなかったのは、他の世界にはファンタジーに出てくるような生き物もいるのかもしれないと思ったからだ。

「ええ。私はリアンデルという世界の人間です。普通はその世界から神を選ぶのですが、アーノスができた当初は動物なんていませんでしたから」

アーノス？

「地球の事ですよ。地球は星の名で、世界としては“アーノス”が正しいのです」

へえー。

「それで、君に担当してほしいのは“レーゼ”という世界だ。でき

たのは“空の神殿”で言うと二十二年と半年、下界では九十年前だね」

「時間の流れが違うのか？」

「うん。世界によってもね。アーノスはことと変わらないし」

でも、九十年って結構経ってるんじゃないかあ……？それとも、神様達にしてみれば長くないのか？

「どちらも正解。僕達にしてみれば大した事のない時間なんだけど、やっぱり地上では長いみたいだね。九十年もの間神がいなかったから、すごく荒れてるんだよ。君が死ぬ原因になった地震も、その影響。他の世界にまで害が及ぶようになるなんて、末期だね」

いや、いや、いや……それかなりマズイだろ。

「そう言うけどね、いい加減な人を神様にするわけにはいかないでしょう？ここ九十年、マトモな生き物が生まれなかったんだよね。レーゼには。だから璃寛のように、他の世界からいい人を選んだわけ」

えーと……それが俺？

シャモアはにつこりとうなずいた。

「もちろん。こんなに条件の合う人はなかなかいない。何より無欲なところがいいね」

面倒臭がりなだけだって。

「さて、もうそろそろ時間がない。他に質問はある？」

俺は少し考えてから答えた。

「具体的に何をすればいいんだ？」

「うーん……何も？神はいるだけで安定するんだ。ただ、レーゼの場合はあそこまでボロボロだと、他の対策も立てないといけないかもしれない。だからとりあえず、世界^{レイゼ}を見て回るのはどうかな。自分の世界がどういところなのか、知っておくべきだしね。細かい事は璃寛や他の神に聞くといい」

璃寛か。腹に一物も二物もありそうなヤツだけど頼りに……って聞こえてるんだった。璃寛の含みのありそうな笑顔がかなり怖い。シャモアは目を逸らした。

「で、君の新しい体だけど、魂の記憶を基にして神のものに創り変えるよ。あくまで創り変えるのであって、前と同じではない。当然外見は変わる。いくらか成長させて、目の色も変えてみようか。使えなかった力も使えるようになっていくはずだから、早く慣れるように頑張ってね」

「わかった」

俺が頷くのを見るとシャモアはスッと右手を上げ、俺の位置では聞き取れないほど小さな声で何かを呟いた。

01：空の神殿（後書き）

ここでお知らせ。

「レーゼの神」の設定については「神々の秘密」をご覧ください。
なお、「神々の箱庭」シリーズでは「はちみつ色の姫」なども同時
連載しております。

こちらが第一作ですので読まなければわからない、という事はありませんが、関係のある話なので興味のある方はぜひご覧ください。

02：美形ゆえの悩み

「はあああああああ

……………」

俺は思わずため息を漏らした。大仰に聞こえるだろうが、これは俺の本心だ。

死んだのは問題ない。むしろ清々しいくらいだ。

強制的に神になったのも……面倒だが百歩、いや一万歩ゆずって良ししよう。

だがこれは……。

千歳という人物は、何というか神に愛されながらも不幸の塊のような少年だった。

……“神に愛されながらも”というのはあくまでたとえである。

彼は全てにおいてその才能を発揮し、運動、勉強共に年齢には不

釣り合いなほど優秀だった。

見た事、聞いた事を一瞬で覚え、応用力、実行力もある。何より優れているのは、その容姿。

千歳はシャモアや璃寛と同等、いや、それを大きく上回るほどの美しさを持っていた。

濡羽色の髪は艶やかで、まだ十五歳の子供だということにどこことなく色気を放っている。灰色の瞳は角度や光の加減によって銀にも見え、その美しさを一層引き立てていた。真っ白な、しかし病的ではない真珠のような肌はどれだけ太陽の下に居ようとも、なぜか日焼けする事がない。女のように見える細い体は男らしくなりたくて鍛えても変わる事が無く、一見華奢なのに武道は超一流という異様な人物にできあがってしまったのである。

千歳は正直、世界中の特に女性が羨むこの外見が好きではなかった。見られないよりは幾分マシだが、それでも女と間違われて嬉しい訳がない。

千歳はノーマルだ。変な趣味は無い。

だというのに街行く男にナンパされ、女に同性のように扱われ、上を脱いで納得させるまで毎回苦勞するのだ。髪が長いわけでもないのに！

何度坊主にしてやろうと思った事か。その度に全力で止められたが。

この顔のせいで彼女も、まともな友人ですらできた事はなかった。

男は千歳の性別を知っていても下心から寄って来るし、女は千歳の容姿に劣等感を抱くらしい。

せめて男らしい美しさなら良かったものを。

そう。問題なのはその容姿。

俺にとってどんな女よりも女っぽいこの顔！体！肌！唯一の救いは声がそれほど高くない事だろうか。……それでもアルトだが。

「怨む。本気で怨むぞ、シャモア」

相手が最高神である事も忘れ、怒気のこもった声で唸る。

俺は今、川に映る自分の姿を覗き込んでいた。

そこに映るのは十八ほどの青年……いや、女？どちらでも通るような、判断に困る外見だ。

前よりは体の線も丸くないが、胸に何かつめれば女に見える。逆に言えば、胸がないからかうじて男に見える程度だ。喉仏が無い事や、髪が長くなっているのも原因の一つだろう。男にしては華奢

だが、女にしては胸がない。そんな感じだろうか。

灰色だった瞳はもう、完全な銀だった。よく見ると、金の線が何本か入っている。

……何より。

なぜ！なぜ美貌に拍車がかかっているんだ！前でも十分規格外な顔だったのに！

身長も高くなっただし、十人中二人くらいは男に見てくれるだろう。きつと。だが、残りの八人はまず間違いなく女だと思って接して来るに違いない。

そういう意味でのため息だった。

「ま、なったもんは仕方ないか……。近寄りがたく感じてくれる事を祈るとしよう」

とりあえず、現在地を確認しなければならぬ。どうやらここは山の中らしいが、どの方角に町があるのかとか、そもそもこの世界がどういう世界なのか、俺は全く知らないのだ。

「あ、千歳さん？探しましたよ。移動したでしょう」

「あれ、璃寛？何でここに……。そういや、『璃寛や他の神に聞け』って言ってたっけ。違う世界も自由に行き来できるのか」

ん？という事はこれから他の神が来る可能性があるのか。そして俺も行く事ができる、と。

「……何を考えているのか大体想像できますが、貴方の場合は時差をきちんと考えてくださいね。私がここに一日いたところでアーノスでは六時間しか経ちませんが、貴方はその逆なのですよ」

ああ、そうか。で、何しに来たんだ？

「……顔に出やすい人ですね。声に出して言うてください。貴方は神。私と同じくらい偉いのです。私が貴方の心を読む事はできません。できるとしたら、シャモア様と冥界の神くらいのものですよ」

「へえ。で、何か用？」

読んでももらえないとか面倒だな。あゝ、でもそれじゃあ隠し事できないのか。

「何か用、って……貴方のために来たんですよ。それとも、なんの知識もいらないのですか？神しか知らぬ事を教えて差し上げようと思っただのに。余計なお世話だと言っなら帰りましよう」

「あゝっ！待った！俺が悪かったから教えてくれ！」

「教えてください、でしょう？」

「……教えてください、璃寛様！」

数分後、俺は心なしぐったりして岩に座っていた。……いや、気のせいではない。疲れた。

璃寛は向かいの大きい岩の上でのんびりとくつろいでいる。

というか。

「なんか璃寛、性格変わってないか？」

「貴方が私と同格になったからですよ。お互いに嘘はつけませんし、演技もできません」

「なるほどねえ」

こっちか素の璃寛だという事か。俺の勘、当たってたな。絶対黒くてSタイプだと思った。

「千歳さん、今何考えました？」

「いや、何でもない」

うわー、演技ができないってしんどいな。特に演技するのに慣れている俺からしたら。

俺は昔から外見のせいで苦労した。

男子から告られる、女子に同性扱いされる（家事ができたのも理由の一つなのかも）、痴漢なんて日常茶飯事だ。

ごく稀にだが、誘拐もあった。普通の人なら一生体験しないだろうに、俺は数年に一度の割合で被害にあったのだ。

俺欲しさに借金取りがない借金をでっち上げた事も……思い出したくはないがあつたな。あと少しで売られるところだった。

警察にはしょっちゅうお世話になってたし、絶対顔覚えられてた。「またお前か」って顔されるんだ……何も悪い事してないのに。

そんな訳で少しでもトラブルを減らすために、時と場合に応じて自分を作るのが当たり前になっていた。だから十五のわりに大人びてるなんて言われるようになったんだな。

「神になれ」なんて言われて落ち着いていられるのも経験から。平和な日本に住んでいたのに、命のやり取りをした事も両手では足りないほどあるし。

レーゼでもこの顔のせいでトラブるのかねえ。

02：美形ゆえの悩み（後書き）

“ 空の神殿 《ロアー・ジエ》 ” & アーノスの一時間＝レーゼの四日

03：神とは（前書き）

別名“神についての説明”の回。

03：神とは

「……忌々しい顔だ」

俺の独り言に、璃寛がこちらを向いた。

「顔が気に入らないのですか？芸術と言っていいほど美しいのに」

「色々あつてな」

俺は曖昧に返す。

「姿は違つように見せかける事ができますが……」

「本当か!？」

「ええ、まあ。神は基本、他の生き物には見えません。特に知性のある生き物は、その分欲が多いですからね。……ああ、今の貴方はまだ魂が体に馴染んでないので見えるはずですが、暫くすると見えなくなると思えます。ですから、我々神は人前に出る時は姿が見えるようにしてはなりません。その過程で姿を変化させる術を变身魔法と言います」

「……今の俺使えないし」

馴染むまでここにこもるか？

よほど落ち込んで見えたのか、璃寛は苦笑して言った。

「あまり使わない方がいいですよ？アーノスみたいになります」

地球みたいに……？

「いやあ、若気の至りと言いましようか。アーノスができてすぐや人間が生まれた頃はよく遊びに行きましてねえ。姿を変えて。そうしたら、あちらこちらで“父なる神”“アッラー”“ヤハウエ”など、色々な名前を貰って……」

「は？もしかして、それ全部璃寛の事なのか？宗教問題とか深刻なのに、その原因？」

「だから若気の至りだと言ったでしょう。今はしてませんよ」

今してなくても、それは問題だろう。過去も、そして現在進行形でたくさんの人が死んでるのに。

本気で神を信じている人達が聞いたらどう思うだろうか。

……俺は絶対やめところ。うん。

「あれ、仏教はゴータマ・シッダールタ（釈迦）で、儒教は孔子^{イコル}だから人間だろ。キリスト教、イスラム教、ユダヤ教は唯一神で「璃寛。じゃあ、神話に神がたくさん出てくるのは全部作り話なのか？」

日本神話やギリシャ神話などには神様の子供がたくさんいるよな？天皇陛下だって神の子孫だっていうし。まあ、本当かどうかは本人達にもわからないだろうけど。家系図が残っていたとしても、本当である保証はないんだしな。

「神話の神々ですか？あれは私の使徒や神子、巫女ですよ」

「しと？みことみこって別なのか？」

「そうですね……まず、神の位から説明しましょうか。最高神であるシャモア様を頂点として、その下に弟君である冥界の神

ああ、名前は本人に聞いてくださいね。神にとって名は重要ですから、他人の口から教えるような事があってはなりません。よく覚えておいてください」

何か物凄く大切な事のようにだから、俺は黙って頷いた。

「そしてその下に我々“世界の管理者”がきます。生きている年数が天と地ほど違っても、我々の地位は同等です。一つの世界に一人の神　　本当は“一柱”が正しいのですが、元が神ではないのでこう呼びます　　が決まりですから、神の中では我々が最下位となります。ここまでではいいですか？」

「ああ」

「ここから言う事はシャモア様と冥界の神には当てはまらない事がほとんどです。その事を頭に入れておいてください」

「わかった」

これが学校の授業とかだったら即寝るのだが、璃寛が真剣に話しているのがわかったから大人しく聞いていた。俺にも十二分に関係する事だし。

「神の能力では命を生み出す事はできない、と“空の神殿”^{ロー・ジェ}で言いましたよね。ですが、能力をあげたりする事はできるのです。使徒や神子、巫女はそういう者達の事です。地位は使徒が上、神子や巫女が続ぎ、その下に人間などの生き物がきます」

璃寛は一度言葉を切り、頭の中で整理するように間を開けた。

「生き物に付属させる事ができる能力としては例えば……何等かの才能や記憶力、身体強化など。その代表格として不老不死が挙げられます。というか、これが基準となります」

ここまで理解できたか、という視線を感じたので俺は頷き返した。

「我々は神ですから、当然不老不死です。しかし、自分は死なないのに親しい人が変わってゆく。散ってゆく。中には発狂寸前までいった神もいました。それに、神の仕事はとも一人ではできないほど忙しく……」

「ちょっと待て。する事はないって言ってなかったか？」

「ええ、ありませんよ。私がいい例です。その事も話しますから、聞いてください」

俺は璃寛の言葉に疑問符を大量に浮かべながらも、一応頷いた。

「まあ、そういう訳ですから、神の友及び部下のような者が必要になったんです。こうしてできたのが“使徒”^{ロー・ジェ}。不老で“空の神殿”へ行く事ができる能力を与えられた者です。所謂天使のようなものだと思ってください。そして、不老不死ではありませんが何等かの能力を与えられた“神のお気に入り”。それが“神子”及び“巫

女”です。違いは性別と文字ですね。もしかすると、レーゼではまた別の名で呼ばれているかもしれません。あと、神子や巫女は体の何処かに其々《それぞれ》の神を表す紋章があります。私の場合は蓮の花と霧ですね」

霧？霧ってどんな文様なんだろう。小さくて細かい点々か？

「……って事はつまり、楽しかったら使徒を増やせと？」

「はい。そういう事です。勿論、ちゃんと選んでくださいね。神に近い能力を与えるという事ですから」

……面倒な。

「あ、そう言えば忘れるところでした。貴方はこれから“ウイスタリア”と名乗ってくださいね」

「ウイスタリア？」

「ええ、神名しんめいです。先程神の名は重要だと言ったでしょう？元の名は神にしか名乗ってはいけませんよ。その者が死ぬまで縛られる事になります。……名乗らなければ知られても問題は無いのですが」

「わかった。ところで、璃寛の神名は？」

「私はありません。強いて言うなら人間達がつけた沢山の名ですかね？千歳さんも増えるかもしれませんよ」

ええ……それは勘弁。名前が増えるとか面倒臭いしな。

04：美形コンプレックス（前書き）

わかりにくい点などがあつたら指摘してください。
なまじ裏設定を知っているだけに、作者にしかわからないところがあるかもしれません。

04：美形コンプレックス

神についてはまだ色々ありそうだが、その都度聞くといい事で話を打ち切った。

あとこの外見だが……うん、考えないようにしよう。すごく残念だけど美人な女に見えろとか、ヘタしたら超絶美形のオカマさんに見えるとか。

……体格が少し良くなったのが裏目に出たか？まあ、本当に残念な男よりはいいが。

よし、この話は終わ……

「ああ、そういえば」

璃寛が俺の思考を遮るように口を開いた。

何だろう。嫌な予感しかしないのだが。

「その髪ですが、切ってもすぐに伸びるので無駄ですよ」

何だコイツエスパーか？切ろうと思っていたのをなぜ知っている！神同士は心読めないんじゃない……やべ、演技もできないんだっただ顔に出てたのか。

「すぐってどのくらいだ？」

「一瞬です」

うわゝ、ずっとこの長さなのかよ。

俺の髪は腰よりも長く、地球では女の人でもそうそういない長さである。レーゼがどうかは知らないが、きっと一般的ではないだろう。邪魔だし。ある程度余裕のある生活をしていないとできない髪型だ。

「邪魔ならくくっておけばいいですよ」

癪に障る笑顔だ。他のヤツなら鈍いのかな、とか他意はないのだろうと思うところだが、コイツの場合は確信を持って言えるな。絶対おもしろがってやがる。

コイツの性格は演技でないため、神の力は及ばないらしい。忌々しい事だ。

「髪がすぐ伸びるのは、不老不死と関係あるのか？」

「ありますよ。基本的には髪型も含め、私達の外見は変わりませんから。ただ、千歳さんはまだわかりませんね」

「変わるかもしれないのか!？」

ちよつと興奮気味に言う。

「ええ。神の力は強力で、シャモア様に体を作り替えていたただかなくてはとも耐えられませんか。千歳さんが死ぬのを待っていたのはそのためです」

そうだったのか。……という事は、生きている生き物は能力を与える事はできても作り替える事はできないらしい。

「そして、作り替えられた体は、その魂と力に釣り合うように変化します。現時点では十八くらいなのですが、魂が馴染んで力が使えるようになれば、変わる可能性もなくはないでしょう」

「変わるってどう変わるんだ？」

「そうですねえ……年齢が上がったり下がったり、といったところでしょうか」

下がる事もあるんだな。まあ、人（？）それぞれという事か。

しかし、外見年齢が変わるのは有難い。十五歳から十八歳になった時のように、体格が変わるかもしれないじゃないか。より男らしく。十八じゃあ、まだまだ子供だしな。いつそのこと三十とか四十くらいになった方が……待てよ。外見年齢が変わるだけで、基本的な容姿は変わらないんだよな。この顔でガタイが良くなっても、見られなくなるだけのような気がする。それに、自分で言うのも何だが、この浮世離れした容姿だ。オッサンになっても若々しいなんて事も……否定できない。

「はあああ

……………」

やっぱり考えないようにしよう。

璃寛も意地が悪いよな。忘れようとした途端にこんな話をするなんて。

とりあえず、俺はこの世界　　レーゼについて知らなければならぬ。神が自分の世界について何もわからないなんて間抜けすぎる。いや、この場合仕方ないのだが、俺だったら本当に神なのか疑うな。

と、いうわけで、まずは情報収集から。

確か、レーゼはできてからまだ九十年。たったこれだけの年数でどれだけの生物が存在するのか、全く想像できない。

シャモアには“九十年は長い”みたいな事を言った（思った）が、それはあくまで“アーノスの人間”基準の話だ。レーゼの人間はもっと長寿かもしれないし、人間自体存在しない可能性もある。何より、“生命の進化の過程”からすれば九十年なんてほんの一瞬だ。

だって、なあ？アーノスなんて始めは何もなかったんだ。それから気が遠くなるほど長い年月をかけて、今がある。人間が誕生してからよりも、その前の方がずっと長いんだ。

それに比べたら、たった九十年。

アーノスの人間なら、まだ生きている人がチラホラいる程度の間だ。九十年間神の不在による災害が起こっていると考えると長い、世界としてはまだ目を開ける事さえままならないヒヨッコである。シャモアの話からして何らかの知的生物はいるのだろうが、どの程度発達しているのかは甚だ疑問である。

「なあ、璃寛」

「何でしょう?」

考え込んでいた俺を黙って見ていた璃寛は、すぐに反応した。

「少し気になったんだが、アーノスはできた当初宇宙しかなかったんだよね?」

「ええ、そうでしたね」

「そこから様々な生命が誕生するまで相当な年月がかかったはずだ。なのに、レーゼはたった九十年で空気がある。水や土があつて、植物が存在する。恐らく動物や知的生物も。……なぜなんだ?」

そう、明らかに成長速度が違いすぎる。これは“ロアー・シエ空の神殿”でも思つた事だつた。

「そうですね。……まず、世界というものは無数にあります。全てを把握しているのはシャモア様か冥界の神……後は神になったのが早い方々でしょうか。私は七十くらいしか知りません」

世界はそんなにあつたのか。それはシャモア一人で管理できなくなつても無理はない。

「それらの世界は全て二つとない異なるものですが、いくつかに分類する事ができます。例えば“魔術の世界”、“科学の世界”、“自然の世界”といったように。そしてアーノスは、“進化の世界”と言われています」

進化? ちょっと意外だ。科学かと思つたんだが。……まあ、きつ

と“科学の世界”はSFとかにあるような感じなんだろう。アンドロイドとか空飛ぶ車とかタイムマシンとか。

「“進化の世界”の特徴は“無”　つまり宇宙から長い長い時を経て成長してゆく事です。それ以外の世界は最初からある程度生命があり、その代わり宇宙がなくて進化もそれほどもしません」

「へえ、宇宙がないのか。じゃあ、太陽とか月は？」

「ただのエネルギー体です」

動く光の塊ってか？変な感じだな。

「ちなみにレーゼの分類は何なんだ？」

「まだわかっていません。神がない世界に降りていいのはシャモア様と冥界の神だけです、あの方達はそれどころではありませんでしたから」

それはそれで面白そうだな。そのうち嫌でもわかるだろう。

さてと。

半ば無理矢理とはいえ、引き受けてしまったからにはしっかりとやらなければならない。俺は面倒臭がりで自分から動く事はほとんどないが、やる事はきちんとやるのだ。

まずは話ができるヤツを探すべきか　と俺が目線を上に上げた時、十メートルもあるかという巨体が目に入った。

『おお、神よ!』

な、何か叫んでるぞ。

「あれは……ドラゴンですねえ」

相変わらずのマイペースっぷりで。璃寛さん。

黒い鱗に金の瞳をしたドラゴンは俺達の上に来ると、あの巨体では着陸できないからか人型になった。

……当然美形です、ハイ。

しかし、俺の足元にも及びません。(遠い目)

せめて俺以上の美形がいたら少しは楽になるというのに!

シャモアのアホ

!!!!!!

04：美形コンプレックス（後書き）

千歳は自分の恵まれた容姿を嫌がりすぎです。
まあ、それだけの事があったのですが。

S i d e S t o r y : 神の誕生 (前書き)

今回は短めです。

Side Story：神の誕生

妾にはすぐにわかった。

体を貫くような衝撃

レーゼに神が生まれたのだと。

隣で寝ていた我が夫、クロムも気付いたようじゃ。窺うように半身を起こしておる。

妾達ドラゴンには、生まれつきレーゼについての知識が備わっておった。基本的なものだけだが、とても役に立っている。

例えば、レーゼに災害が多いのは神がいないためであるという事。他の種族が知っておるかはわからんが、何か力の強い者が降り立ったのは感じただろう。もしかすると鈍い人間共は気付いていないかもしれないんが、何にせよ待ちに待った神の誕生である。嬉しくないわけがあるうか。

「クロム、何をしておる」

妾の声に、クロムがこちらを向いた。同種でなければわかりにくいだろうが、その顔には歓喜と困惑が表れておる。

神の降臨がこの上無く嬉しいが、突然の事すぎて頭がついていていないらしいの。

妾は思わず苦笑した。もう少し早ければ、妾もあんな顔をしていたかもしれないからじゃ。今は守るべき宝がある。

「早うお迎えに行かんか。他の種族　　特に人間なんぞに先を越されては、取り返しのつかない事になりかねんぞ」

「あ、ああ、そうじゃ。中立の立場に居る我らが保護して差し上げねば、いらん事を吹き込まれかねん」

クロムは我に返ると、洞窟を出て飛び去って行った。

今、世の中は戦乱で淀んでおる。

どの種族も、物の奪い合いじゃ。食べ物であつたり、土地であつたり……私利私欲でないところは褒めるべきなのかもしれんが、争いは争い。妾には不快なものでしかない。

それに、そのうち己の欲のために血を流す者が出てくる事は目に見えておる。生きるためでない殺しは愚かとしか言いようがないではないか。他人にした事は必ず己に返ってくる。その先には滅びしか待っておりゃん。

妾達ドラゴン是人型になれる上に魔術も使え、言語も使用するが、

分類上は魔物である。

それは基本型が人型でない事や卵生である事、強さが並大抵ではない事などが理由なのであろう。しかし、最大の違いは生き方にあると妾は考えておるのじゃ。

いわゆる人類と呼ばれる動物は、数え方が“人”であり人型をしておる。一人で行動する事もあるが基本は群れて暮らし、欲が多い。

その“欲”が人類と魔物の違いなのじゃ。

ドラゴンを含め、魔物と呼ばれる類いの生物と人類以外の動物は本能で生きる。食べたい、眠りたい、といった欲しかないのじゃ。ああ、愛しき者に対する独占欲はあるかもしれんな。

だが、人類にはもつとどす黒い欲望がある。

妾にはない感情であるから上手く説明できんが、嫉妬とか羨望と言われるものだろうか。

例えば、妾の前に妾にないもの　妾以上の力とか、知識とか、宝とか　を持つた者がおるとしよう。妾はそれを羨ましいと思う。が、それで終わりじゃ。人類なら奪おうとするだろうがの。

欲しいと思うものもまた違うよの。

妾には人類が欲しがるものがなぜ必要なのか、全く理解できん。妾はただ、静かに暮らせたなら良いのじゃ。目と鼻の先で騒がれると

良い迷惑よ。

…… ああ、クロムが帰って来おったわ。

さあ、我らの神を出迎えねばの。

05:ドラゴン

現在、俺は黒い鱗のドラゴンに乗っている。このドラゴン、名前はクロムというらしい。聞いたところではつがいのドラゴンと共にレーゼができた当初から生きているとか。色々と聞く事ができそうだ。

ついでに言うと、璃寛はアーノスへ帰って行った。部下（使徒）に何の説明もせずに来たとかで、また来るにせよ一端帰るべきだと俺が言ったからだ。

居てくれるのはありがたいんだけどな、俺の世界だから他の奴に頼りっぱなしっていうのもどうかと思うし。

『ウイスタリア様、あそこです。着きました』

クロムの声に身を乗り出すと、前方に大きな洞窟があった。ドラゴンに洞窟、うん。ベタだな。

クロムがスツと着地する。ドラゴンつてのは以外に揺れないようだな。体が大きいからか？あと、風や寒さは魔法で防いでくれていたみたいだ。聞いてないのに何となくわかるのは、神様だからかな。

神っていつても、現時点での俺の能力は超人的な（神だから当然）身体能力と回復力、無駄に多い（というか無限の）魔力、あとは格下（つまりは神以外）の心が読める事だけだ。生前の俺の能力は使えるはずだから、武道は一通りできるな。

これだけじゃあ、他の神の足元にも及ばない。まあ、神以外なら勝てるだろうというところでもないチートなのだが。この説明をした後、去り際に璃寛の奴「あ、神に魔法の類いは効きませんからね」なんていう余計な一言を言い放って行きやがった。

何が余計かって？

先入観だよ、先入観。正確には「魔法の類いは効かないが、攻撃の意識を持つているもの限定」もしくは「意識して遮断できる」だ。だからクロムの魔法は効いたんだが、最初は先入観からシャットアウトしていたようだ。……寒かった。

クロムの背中から飛び降り、俺は洞窟を凝視した。

クロムのような巨体が入ってもまだ余裕のありそうな入り口だ。こんな都合のいい場所、最初からあったのだろうか。それとも、自分で作ったのか？

「中へ入りましょう。エルムも待つております故」

俺に気を使つてか、人間の姿になったクロムが言う。俺は頷き、クロムの案内で洞窟内へ足を踏み入れた。

結論。クロムのつがいとかいうメスのドラゴンは、クロム以上にでかかった。どうやら人間とは違い、メスの方が大きい種族のようだ。

『御初に御目にかかります、エルムと申します。子供がいますので、このままで失礼いたします』

エルムは丁寧な頭を下げてきた。……何か日本人みたいだな。きつと俺相手にぐらいいしかしないんだらうけど。

「ウイスタリアだ。長いからウイリアでいい。敬語も不用だ。クロムもな」

ウイリアというのは、璃寛がつけた略称だ。女っぽくて抵抗感が物凄くあったが、ネームセンスのない俺にこれ以上の略称が思い付くはずもなく決定した。また変な誤解を招かなければいいけど。

頷く二人（いや、二匹か？一人と一匹？）を見てから、俺はふと気になった事を口にした。

「子供がいるのか？」

『まだ卵だかの』

敬語をなくした途端、古くさい話し方になったエルムに戸惑いつつ、へえ、と返した。

『見てみるかえ?』

「いいのか?」

『卵と言えどドラゴン。そう簡単に傷付く事はありませんまい。仮に崖から落としたところで無傷ではないかと』

答えたのはドラゴンに戻ったクロムだった。それに苦笑しつつ（ドラゴンの表情はわからんが、たぶん）、エルムが言う。

『それでも心配なのが母親なのじゃが……まあ、ウィリア様なら問題なかるう』

何か無駄に厚い信頼に若干顔がひきつるのを感じつつ、お願いする事にした。

だって、ドラゴンの卵だぞ? きっとこの世界でも早々見られるものじゃあないはずだ。ドラゴンだって、間近で見たり乗ったりできてテンション上がりっぱなしだったってのに。

エルムに連れて来られたのは、更に奥の部屋のように広がっている空間だった。その中心に、四つの卵が置かれている。

「ドラゴンの卵って、温める必要がないのか?」

無造作に置かれた卵の大きさに驚きながら、俺は尋ねた。

『妾達は鳥とは違うからの。まだ鱗のしっかりしておらぬ子供のうちは火傷してしまう。ましてや、卵となると』

そうか、ドラゴンは爬虫類。変温動物なのか。普段は鱗が外の温度差から体を守り、丁度良い体温を保っているに違いない。

「じゃあ、見ているだけなのか？」

『そうなるかの。同族である妾達ならば触れないわけでもないが、潰しかねんしの』

それは……俺も同じなのか。崖から落ちても傷一つつかないのに……というか、俺の場合レーゼにあるものは全て素手で潰せると思っていた方がいいか。力の加減は注意しなくては。

四つの卵はそれぞれ違う色で、赤、青、黄、緑だった。どれも大きさ以外は普通の卵と変わりなく、そんなに固く見えない。が、エルムが言うなら固いのだろう。大きさは大体五十センチメートルくらいだ。楕円形の一番長い所が。

「殻の色って意味あるのか？」

『これは鱗の色じゃ。赤は火、青は水、黄は土、緑は風のドラゴンであろう』

属性に関係あるのか。

「エルムとクロムは？」

『妾は光じゃな』

『我は闇。尤も、鱗の色と属性が一致するのは初めの六頭だけのようじゃ』

へえ………って事は。

「今のところドラゴンは二頭だけ？」

『そうなるの。主属性のドラゴンが六頭、この子らが孵れば魔術がより発達するであろうよ』

「………どういう事だ？」

あまりにもものを知らない俺に、二頭は嫌な顔一つせず説明してくれた。

それによると。

曰く、魔術の属性は今現在、光と闇しかないのだとか。その理由は、精霊が生まれていないから。

ドラゴンは卵から孵るとまず、魔力を食らう。そして食べた魔力を体内で変換し、吐き出す。この吐き出されたものが精霊だ。

生まれたばかりの精霊には大した力もないが、周りの精霊と合体したりして力をつけてゆく。これを中位精霊と言う。また、話せるだけの力をつけた精霊を高位精霊と言う。

魔術は精霊がいなければ使えない。だから、その属性の精霊がドラゴンによって生み出されなければならないのだ。

魔術と魔法の違いはここである。

魔法は精霊を介さず力をふるう事ができる。しかし、大量の魔力を消費する上に生まれ持った資質も重要だ。そのため、使える種族は僅かしかない。

魔術は魔法の使えない種族でも力をふるう事ができる。簡単に言えば、魔法を息をするように操れる精霊に力を貸してもらおうというものだ。代価は魔力だが、魔法ほど消費しない。その代わり、精霊に好かれなければ行使できないのだ。

ついでに言うと、魔法は無詠唱。魔術は詠唱有りで、場合によっては魔法陣や魔石のような媒介がいるらしい。魔法では十の属性があるから、ドラゴンも最低十……つまり後四頭は生まれるはず。精霊とドラゴンはかなり密接な関係にあるようだ。

もちろん俺はどちらも使えるはずだけど、まだ体に馴染んでないから無理っばい。今から楽しみだな。せっかく新しい生をもらったんだから楽しまないと損だし。

俺はどんな子供が生まれてくるのかと、期待に満ちた目で卵を見つめた。

06：レーゼにおける魔術と魔法と人類

エルムとクロムは様々な事を教えてくれた。

まず、レーゼには魔術と魔法があり、超能力や錬金術の類いはない。

魔術と魔法の違いは前にも聞いた通り、力を使うのに精霊を介するかどうかだ。魔術はある程度知恵があれば使えるが、魔法は種族や素質によるところが大きい。ため行使できる者は少ない。

属性は光、闇、火、水、土、風の主属性と木、氷、雷、無の副属性から成る。精霊は光と闇しか生まれていないため、魔術では今のところ二種類しか使えないというわけだ。

それから、ドラゴンは大きく分けて三種類いるらしい。

飛ぶ事はできないが力の強い地竜。

空を自由に舞う翼竜。

そして精霊を生み出す古代竜。

まだできて百年も経っていないレーゼで“古代”というのは変な感じがするが、それだけ強く数が少ないという事だろう。事実、レーゼで二頭しかない。その古代竜の卵が目の前に四個もあるのだ。

から、すごい事なんだろうなあ。一部の人間とかなら金儲けの道具にしそうだ。

ドラゴンとは基本的に大人しい……というか他の事には無関心なので、力が強くとも何ら問題はない。ただ、縄張りを侵したりなど、彼らを怒らせる事をしなければの話である。そのうち本当にそんな事がありそうだが、まあ自業自得なので余程の事がない限り放置するでしょう。

レーゼには人間以外にも、人類に分類される生き物が八種族いる。魔人、神人、竜人、獣人、エルフ、ダークエルフ、ドワーフ、妖精だ。それプラス精霊と魔物で、ドラゴンは魔物に分類される。基本型が人型ではないからだろうか。

ドラゴンであるエルムとクロムは、人類の事をそれほど知っているわけではない。人里に下りる事など生まれてから数えるほどしかなく、ずっとこの山で暮らしていたのだ。そのため、申し訳なさそうにしながらも基本的な事だけ教えてくれた。

レーゼにおける人間は、魔術を使えるという点と髪や目の色彩が豊かであるという点以外はアーノスと変わらないらしい。尤も、魔術は全員が使えるというわけでもないようだが。

それから、レーゼには“科学”という言葉が存在しない。レーゼの生き物だって道具は使うが、魔術や魔法の世界である以上仕方がないのかもしれない。

魔人はコウモリのような黒い羽を持った種族だ。同じく、神人は

白い天使のような羽がある。しかし邪魔なのか、常に出している人はそういないらしい。九種族中最も魔力が高いと言われる両種族は、魔法を行使する事ができる。ただし、魔人は光、神人は闇の属性と相性が悪いようだ。

竜人は九種族中最も力が強く、竜化ができる種族だ。ドラゴンに比べるとまだまだ弱いし長時間の竜化は体への負担が大きいため危険だが、人類としては十分すぎる力である。竜人によく似ているのが獣人で、彼らは獣化する事ができた。他の種族より素早く、五感が鋭いのが特徴だ。どちらの種族も魔力が全くなく、魔法どころか魔術ですら使う事がままならない。

エルフは主に森に住み、尖った耳に銀の髪、緑の目、白い肌。それとは対照的に、地下に住み尖った耳、白い髪、赤の目、黒に近い褐色の肌をしたのがダークエルフだ。エルフは植物の、ダークエルフは風の声が聞こえると言われている。本当かどうかは二頭でもわからないとか。両種族共に人間より魔力は高いが、使用できる魔法はせいぜい一、二属性。三属性も使えたら超・エリートである。そう考えると、自分の属性以外も使えるエルムとクロムはすごいんだろうな。

ドワーフは山……特に鉱山付近に住んでいる事が多い。これは彼らが鍛冶に長けているからだ。他のものも作るが、鍛冶に関して右に出る者はいない。ドワーフは鉱物の声を聞き、それらの望む通りに作品を作る。これはエルフやダークエルフと違い、確実に言える事なのだそう。男女問わず身長が低く、太くて癖の強い黒か茶色の髪で、酒が大好き。一日のうち大半が物を作るか、酒を飲むかのどちらかだという。魔力は人間より少し少なく、魔術しか使えない。

最後に妖精。彼らは最も精霊に近く、それゆえに媒介さえあれば

詠唱なしで魔術を扱う事ができる。また、魔力量は魔人や神人に劣るものの、全ての属性の魔法に適性がある者も少なくないとか。大体妖精の三分の一ほどがそうらしい。背中に四枚の薄い羽があるが、破れやすいため滅多に出さない。飛ぶ事もできないそれを、では何のために使うのかというと、求愛などで自分の弱い部分をさらす事で信頼をあらわすのだそうだ。基本的に幼い頃は両性で、成人である十六歳くらいには男女どちらかになる。

そうそう。時間はドラゴンにとってどうでもいい事らしく、一日は恐らく二十四時間でだろうという事しかわからなかった。四季はあるが、明確に分けられている様子もない（ドラゴンがいい加減なだけかもしれないが）。呼び方も春夏秋冬なのか、違うのかすら不明のままだった。これらは人類に聞くべきと思う。

驚いたのは月がアーノスよりも一回り大きく、銀色である事だ。エルムとクロムは俺を夜の闇と月の光のようだと誉め称え、むず痒い思いをした。レーゼでは太陽ではなく月を崇めるそうで、俺の外見はその影響だろう。

俺がレーゼへ来てから三ヶ月ほどが過ぎた。

徐々に魂が体に慣れてきたようで、簡単な魔法なは使えるようになっていく。魔術については媒介となるものがなかったため練習していないが、魔法同様基本なら使えるだろう。とはいえ、神の能力から見ればまだまだ基礎の基礎である。

「魔法はコツさえ覚えればあとは簡単じゃからの。妾も昔、よく山を吹っ飛ばしておったわ」

教えやすいように人型になっていたエルムが豪快に笑う。黙っていればサラサラした白髪の清楚な美人なのだが、動いた途端イメージが崩れる。俺としては人形のような綺麗さより、エルムのような方が好きだが。

「山を吹っ飛ばすって……」

顔がひきつるのが自分でもわかった。しかし、俺も一步間違えればそうになっていたのだから笑えない。魔法は魔術に比べると格段に暴走しやすく、これがデメリットでもある。大規模なものは魔術を使った方が安全なのだから。

俺は魂と体の関係で、大した力を使う事ができない。それでも半径二十メートルくらいのクレーターができたのだから、全力だった場合は世界一つ吹き飛びかねないのだ。恐ろしい。

ちなみに、その時練習を見てくれたクロムによると、俺の魔法は古代竜のものよりも少ない魔力で強力な力を出せるそうだ。魔力の純度が高いから、効率的なのだと。魔法はイメージだから、もちろん小さいものも使える。ただ、意識しなければ強くなりすぎる上に、物凄く魔力がもつたいない（魔力を食べるクロム的にはこ

れ重要)らしい。

……まあ、こんなのも神だからな。

レーゼ最強である古代竜に今現在でも勝てるとか普通なんだ、きつと。

というか、そもそも俺にダメージを与える事ができない。そして、指一本で岩を砕ける力だ。……力加減を間違えれば大惨事になる。本当に。神の能力の中に、力の制御が入っていたのはうっかり世界を破壊しないようにだろう。助かったけど。

案外、神様の欠伸やくしゃみで不測の事態が起こるのはどこかの神様の実話だったりして。

そんなこんなで、俺はこの三ヶ月、知識をもらう事と力の把握に努めていた。

06：レーゼにおける魔術と魔法と人類（後書き）

ドラゴンの数え方は「匹」でも「頭」でも良いらしいですが、私は「頭」を使っています。

あの巨体なので。

「匹」は空想上、「頭」は現実的な感じだって電子辞書に載っていました。

07：旅立ち

さて、いよいよ旅立つ日がやって来た。この世界の神としてものを知らないのは困るから、各種族を回ってみるつもりだ。

それともう一つ。

俺が神になってから天災の数はいくらか減ったが、なくなっただけではないようだ。もちろん、神がいるからといって災害がゼロになるわけじゃあない。けど、三ヶ月間に十五回近く嵐が、十回ほど洪水や土砂崩れが、五回も地震があったのだ。以前はそれ以上だったというのだから、本当にヤバイ状態だったに違いない。

やはりシャモアが言った通り、何か他の手を打つしかないようだ。

といっても、俺にその策は思い付かない。世界を見て回りつつ考え、たまに来るであろう神々に知恵を借りるしかないと思う。

「もう行くのか？まだたった三ヶ月ではないか」

クロムが心底残念そうに言う。

「これ、ウィリア様を困らせるでない。妾達が引き留めて良い方ではないじやろうが」

たしなめるエルムに、俺は苦笑しか浮かばない。ドラゴンの神第一主義は徹底しているらしく、何を言っても無駄である事をすでに悟っている。

「そうじゃ、これを持って行かんか」

エルムが差し出したのは赤と青の卵だった。反射的に受け取った俺は、両手で抱いたまま慌てた。

「おい、いいのか？大切な子供だろう」

「ウィリア様と旅をするなど、我らにとってはこの上ない幸せよ」

「ドラゴンの知識や力が役立つ事もあるう。この子にためを思えば、旅をするのも良い経験じゃ」

まあ、エルム達が良いと言うのならこっちに断る理由はない。確かに、ドラゴンが生まれつき持つという知識は情報不足の今、すごく助かるのだ。もちろん、何だっかわかるわけではないが。

「それに、卵を魔法で運べば練習にもなるじやろう？」

……常に風魔法で宙に浮かべると？

「安心せい。卵が割れる事はないゆえ」

そうとわかっていても怖いものは怖い。落とした拍子に踏んだりしたら潰れるんだから。

とはいえ、持って運ぶよりは安全かもしれない。この前ヤシの実みたいに固い木の実を二本の指だけで割ったからな……。

「わかった。そうする」

俺が頷くと、エルムは満足そうに笑った。

「それにしても、人類なんぞに会う必要はないと思うのじゃが……」

ため息混じりに言うクロムを見て俺は疑問符を浮かべる。なぜそんなに嫌がるんだろう？

「人類は仲が良いのか悪いのかわからんからの」

エルムが苦笑する。

「ドラゴンは魔物だが、魔物にも人類にも、ましてや特定の人類に味方する事のない中立じゃ。それは我らが神に仕える誇り高き種族であるゆえ。……まあ、例外はあるが。しかし、人類は違う。争いに巻き込まれるやもしれん。神と知って悪意から近付く者があるやもしれん。そういう事じゃ」

なるほどな。それでも一応、神の端くれなんだから大丈夫だと思うのだが。悪意があっても心の中は丸見えなんだからすぐわかるし、

ちょっとやそつとで傷つくような体じゃない。傷ついてもすぐ治るだろう。大体、魂が体に馴染めば普通の人には見えないはずである。要するに過保護なのだ。

「俺は元々人間だ。立ち回り方もある程度知ってるし、大丈夫だろうさ」

ここ最近使う事のなかった、俺の特技の出番かもしれない。

「ああ、そうだ。俺が神だって事は言わない方がいいだろうか？ 二人の意見を聞いておきたいんだが」

この世界の神の位置づけがよくわからないから、俺には判断しにくい問題だ。そもそも、ずっと神がいなかったんだから“知識”のあるドラゴン以外の種族が信じるかどうかもあるかもしれない。

「そうじゃなあ。神官ならば神の降臨に気付いていてもおかしくはないが……なあ、エルム？」

「うむ。ほとんどの種族が気付いているのではないか？ 特に魔人、神人、妖精なんかは魔力に敏感じゃからの」

あ………そういえば、俺はここに来た頃魔力ダダ洩れな状態だったらしい。璃寛も知っていただろうに、全く教えてくれなかった。今は抑えているが、あの頃なら確かに気付いたかもしれない。何せ俺の魔力量は無限だから。

「魔人、神人、妖精、エルフ、ダークエルフ辺りは魔力の質やあの

時感じた波動なんかで、隠しても無駄やもしれんな。竜人や獣人は力を示せば納得するに違いあるまい。ドワーフは細かい事を気にせんから、嘘か本当かなんて考えんじやろう」

「人間は？」

「あやつらは鈍いからの……気付いているかはわからん。事実を言っても最初は疑うじやろう。確信を得てからは敬意を示すか利用しようと考えるか……」

「やっぱり、一番危ないのは人間かもしれないな。話を聞いたところ一番数が多いらしいし、考え方も多様なのだろう。」

「黙ってて気付くと思うか？」

「それはまず間違いなく気付かん。ごく稀に鋭い奴もいるが、大抵信仰心の強い者じゃから問題あるまい？」

「それなら、人間には隠す方向で行くか。」

「さて、もうそろそろ行くか」

「くれぐれも知性を持たぬ魔物には注意するのじゃぞ！」

「その子を頼むからの。生まれたら名前を付けてやってくれぬか」

「二人が口々に言う。」

「わかった。しばらくしたらまた来るからな」

「そうじゃ、忘れるところじゃった。何かあったらこれを」

クロムが出したのは、紐のついた二つの小さな筒だった。

「まだ渡しておらんかったのか！」

「す、すまぬ。後で聞くから今説教するでない」

エルムは無言で筒を奪い、俺に差し出した。

「これは妾らの鱗で作った笛じゃ。吹けばどこへでも駆けつけるゆえ、必ず身につけてくれたもれ。卵か孵ればその子の鱗でも作ればはぐれずにすむゆえ、できればそうしてほしい」

「へえ、便利だな。ありがたくもらっておこう」

古代竜を呼ぶような機会などない方が良いのだが、迷子防止はいいかもしれない。

「じゃあ、またな！」

「「気をつけて」「」

最後まで過保護だなあ、と笑みを浮かべつつ、俺は断崖絶壁を降り始めた。

今俺は、どこに向かうでもなくのんびりと旅をしている。どの種族がどこに住んでいるか、なんていうのはドラゴンでもわからないから、当てもなく旅するしかないのだ。

便利な事に、神は飲食の必要がない。もちろん食べれないわけではないし、元人間としては手に入るなら食べたいと思う。でも、今のように食料が手に入りにくい状況ではすごく助かる能力（？）である。

「竜人は谷、エルフは森、ダークエルフは地下、ドワーフは山か」

その他の種族は主に平野に住む。当然例外もあるだろうから、一概には言えないが。

「何にせよ、川の近くだろうな」

地球の歴史でも黄河文明アイノスしかり、インダス文明しかり、人類は川の側で栄える傾向がある。更に言えば、山や森のように木の実、動物といった食料のある場所の側がいいかもしれない。

まあ、何ヶ月も彷徨ったところで死なないのだからかまわないのだが。

ああでも、時間をかけすぎるとレーゼから生き物がいなくなるかもしれない。災害程度で世界が滅びる事はないが、生き物はさすが

に無理だ。今の俺の力で守ってやれるとは思えないし、できるだけ急ぐとしよう。

「どうすれば安定するんだろうな。お前、知ってるか？」

宙に浮かぶ濃い赤と青の卵が小さく波打ったように見えたのは、俺の錯覚なのだろうか。

07：旅立ち（後書き）

ドラゴンが人型の時は「人」で数える事にします。

08：古代竜の子供

クロムは魔物に気を付けるように言ったが、正直知性のない魔物など俺の敵ではなかった。元々武道を習っていたためある程度は戦えるし、ちよつとは魔法だって使えるのだ。卵を浮かせる風魔法が乱れる事もない。

知性のある魔物の場合は、出会っても襲いかかって来る事はなかった。本能的に神だとわかるらしく、むしろ物凄く友好的に接してくれる。魔物でも神は敬う対象なんだなあ、と妙に感心した瞬間であった。

というか、人間より賢いんじゃないだろうか。ドラゴンもそうだが、魔物なんて呼んでいたら失礼な気がする。どちらかというと、聖獣とか神獣だと思う。

「ドラゴンってどのくらいで孵るんだろうな」

俺は卵をポンポンと叩きながらつぶやく。もちろん、潰さないように細心の注意を払った上で、だ。直接触るのも危ないから、卵を持つ時は薄く風の膜を纏うようにしている。

「……あ、よく考えたら、村とかを見つけた場合卵どうしようか」

まさか宙に浮かせたまま中へ入るわけにはいかないだろう。地竜や翼竜のドラゴンの卵でさえめずらしいはずなのに、古代竜の卵なんて人の目にさらすのは危険すぎる。一番良いのは卵が孵って人型

をとつてくれる事だが……さすがにそう都合良く行くはずがない。

「つて、ええ!？」

ひびの入っている卵を見て、俺は思わず後ずさった。

俺が叩いたせいかな?それともまさか、今心の中で思った事が現実になったのか……?

前者が圧倒的に有力だが、力の加減はきちんとできていたはずだ。いくら馬鹿力でも、何でもかんでも壊すような馬鹿じゃない。頑丈な卵だから、余程気を抜かない限りは潰すわけがないのだ。

ではやはり、後者……。

パリッ……

かすかに音がして、俺は青い方の卵を覗き込んだ。最悪な事態は回避されたようだ。あの二頭の信頼を裏切るのは申し訳なさすぎる。尤も、二頭ならばどんなに大変な事でも笑って許しそうな気がして、違う意味ですごく怖いのだが。

殻が少し動いているが、やはり固いのか小さな穴は広がりそうにない。俺は人差し指でコン、と叩いた。

バリッ。

いや、バリッって。そこはパリッなんじゃ。

とにかく先程よりも大きな音を立てて、卵が真つ二つに割れた。崖から落としても割れない卵なのに……我ながら恐ろしい力である。

『ふえっ、な、何！？』

中から出て来たのは卵と同じ、深い青色の鱗をしたドラゴンだった。両親と同じ金色の瞳なのは、ドラゴンの特徴なのだろうか。小さな体に丸い瞳が何ともかわいらしい。

「お前、自分が何かわかるか？」

『何って……ドラゴン？あれ、何でわかるのかな』

ドラゴンは前足を上げたり、しっぽを動かしたりして自分の体を確かめたりしている。

……普通生まれてすぐの生き物って、こんな仕草をするだろうか。いくら最初からたくさんの知識があつて、賢いドラゴンでもおかしくはないか？

「なあ、もしかして、前世の記憶とかあるか？」

『えっ、何でわかるの！？』

やっぱりか。

「転生者だな。どんな世界にいたんだ？」

青いドラゴンの話によると、地球アイノスによく似た世界だったようだ。ただ、もう少し科学が発達していて、戦争が当たり前のようになっている。地球アイノスほど平和な世界はめずらしいのかもしれない。

いや、地球アイノスだって平和と云っていいか。日本が特別平和だったただけで、戦争やテロはあった。犯罪だってしょっちゅう起こるし、食べ物がなくて餓死する人々もいたのだ。他の世界に比べれば平和かもしれないが、平和な世界だと言い切る事はできない。

それはともかく、地球アイノスと変わらない世界なら価値観もそれほど変わらないだろう。気が楽でいいかもしれない。

『そういえば、転生がどうか聞いた気がするなあ』

何て適当な。まあ、俺も神なんていうとんでもないものでなければ、真面目に聞かなかったかもしれないが。

「お前、名前はどつする？ 転生前のほうがいいか？」

『うーん……前世と今世は別だから、よかつたらつけてもらえないかな』

「じゃあラピスだな」

『それってラピスラズリ？』

「ああ。宝石の名前だけど、濃い紫みの青もそう言うんだ。お前の鱗の色にピッタリだろう？」

『うん。ピッタリの名前だね。不思議だなあ、真名はラピスラズリなんだよ。偶然かな』

真名？

「真名って何だ？」

『ええっと、ドラゴンだけじゃなく人類とか知性のある魔物にあるものみたいだね。この真名が全く同じ人が一人だけいて、それを魂の伴侶って言うんだって。……あれ、何で知らないの？』

「それは……」

俺は軽く事情を説明した。ドラゴンの神への態度は本能的なものらしいから、転生者であるラピスにもすり込まれているだろうし。

話が終わると、ラピスは納得したように頷いた。なかなか変わったヤツだと思う。普通神なんて言われて頷ける人なんているだろうか。

『神様、なんだあ。どうりですごい力だと思った』

「わかるのか？」

『なんとなく。ドラゴンだからなのかな？ドラゴンは神に仕える種族なんだって』

ますます魔物っていうのはおかしいような気がしてきた。“魔物

「悪」みたいなのは偏見だってわかってるけど。」

『あ、そうだ。この子も助けてあげないと』

ラピスは傍にあつた赤い卵を鼻でつついた。

「助ける？」

『ドラゴンの卵の殻は固すぎて、自力で割るのは難しいみたい』

子供とはいえドラゴンが割れない卵って。しかし、さっきの行動は正しかったんだな。

俺は同じように、人差し指で軽く叩いた。

バリン。

『ん……あれ？どこどこやねん』

赤いドラゴンの第一声はこれだった。……まさか。

『転生者？』

『おお、その通りや。で、別嬪さんのねーちゃんとそっちのドラゴンは誰や？』

若干引きつった笑みを浮かべつつ説明をすると、赤いドラゴンは

目を丸くした。

『ねーちゃん、にーちゃんやったんかいな』

……そこにつっこむな。

『私、女の人だと思ってたんだけど』

ブルータス、お前もか！（違う）

『しかし、神さんなあ。転生前にも会^あったけど、変わったお人ばかりや。それにしても、三人が三人共転生者^おって』

『一柱と二頭が正しいんじゃ？』

いや、確か璃寛が元々人間だから“人”でもいい、みたいな事を言っていたような？まあ、今は置いておくとして。

「とりあえず、お前は名前どうしたい？」

『ラピスと同じように決めてもらえへんかなあ？』

「カーマインってのはどうだ？」

『ええよ。赤色やな。わしの真名はクリムゾンやねんけど、赤つながりなんかな？』

そういえばクリムゾンレッドってあったな。意図してつけたわけじゃないから何とも返せないが。

「そういえば、俺の名前を言ってなかったな。俺の神名はウイスタリアだ。長いからウイリアとでも呼んでくれ」

ウイスタリアは藤の事だ。つまり、紫色。本名は千歳で緑色だが、全く接点が見つからない。シャモアはどういうつもりでつけたのだろうか。

ついでに、シャモアと璃寛は茶色だったはずだ。今まで意識した事はなかったが、色の名前ばかりだな。エルムもエルムグリーン、クロムはクロムグリーン、クロムイエロー、クロムオレンジなんていう色があったはずだし。もし名前を付ける機会があったら、そろえてみるのも面白いかもしれない。

『わかった。ウイリアね』

『やっぱり女っぽい名前やなあ。ホンマに男なん？ねーちゃんの間違いちゃうん？』

……こいつは転生者とはいえ、本当にドラゴンだろうか。それともただKYなだけか？

ちょっと腹が立ったから軽く小突いてやった。「あゝれゝ」なんていう声が段々小さくなっていったが、気にしない事にしよう。

ん？ラピス、顔が引きつっているぞ。

09：契約

『世界を安定させる方法、なあ。悪いんやけど、何も知らんわ』

さすがドラゴンの子供だと言っべきか、傷一つなく戻って来た力
ーマインが言った。

『私も』

まあ、俺だって知らないのだから、大して期待してはいなかった。
やはり、璃寛辺りに聞くしかないようだ。いつ来るかわからないか
ら、できれば自力で解決したいのだが。

ちなみに、カーマインは前世で中世ヨーロッパの文化を持つ世界
に住んでいたらしい。地球アースと同じように魔法などはないし、魔物も
いないとか。違うのは獣人がいる事で、色々な世界があるんだなあ、
と改めて思う。

「ま、とりあえず村でも町でも見つける事だな」

今は大体夏くらいの気候である。レーゼに来た時は春くらいだっ
たから、地球アースと一年の日数は変わらないのかもしれない。

旅立つてからは三週間くらい経っている。地球換算アースだから、一週
間を七日として、だ。実際どうなのかは、俺にもラピスにもカーマ
インにもわからない。何せどの世界も時間がバラバラだったのだ。
一週間が六日だったり一年が三百五十五日だったり、微妙にずれて

いる。一日が二十四時間だという点を除けば、何一つ一致しなかった。

『ウィリア、思ったんだけど、レーゼってできてからそんなに経っていないんだよね？』

「ああ。確か九十年だったな」

『それだけしか経っていないのなら、生き物の数も少ないんじゃないかな』

“進化”の世界である地球だからこそ少しずつ数が増え、高度な文明が栄えるようになったのかと思っていたのだが、違う世界出身であるラピスがそう言うのならそうかもしれない。“進化”の世界とそうでない世界の違いを、きちんと聞いておかなければ。

『それやったら、当てもなく歩いともしゃあないんとちゃう？レーゼがどのくらいの広さかは知らんけど、効率悪いわ』

確かに、その通りである。俺も薄々感じてたけどな。こればかりはどうしようもない。

『なあ、ウィリア。わしらドラゴンは、何を食べて生きとると思う？』

「何を……？」

突然の言葉に困惑しながら、エルム達と過ごした三ヶ月を振り返

つてみた。……何も食べていなかった気がする。

『ドラゴンはな、魔力を食べるんや』

魔力とは、命ある者が宿す力である。人類や魔物はもちろん、普通の動物や草木にもある。魔力がなくなる事はすなわち死を意味するほどで、魔術や魔法の使えない竜人や獣人でさえわずかながら宿している。

『せやから、魔力には敏感やねん。初対面のウィリアをなんとなく神様なんかなくって思っくらいには』

それって相当なんじゃ？

『でな、自然のものよりも魔物とか人類の方がいっぱい魔力宿してるみたいやねん。あ、竜人と獣人は別やけど。まあ、竜人は同種の勘みたいなんでなんとなくわかるし、獣人も匂いでわかるから』

「……つまり？」

『私達には人類が多くいる場所がわかるって事だよ』

予想はしていたが、ドラゴンも大概チートだな。食料を探すためなんだろうが。エルムが卵を持って行けって言ったのはこれだったのかもしれないな。

「それは助かる……って、そっぴやお前ら何も食ってないよな？」

『そう。せやから食べたいんやけど』

「じゃあ適当に狩って来る。それとも、生きている方がいいか？」

『どっちでも変わらんけど、ウィリアのんもらったらあかんのか？』

神に魔力をねだるドラゴンがいるとは。エルムとクロムなら考えもしなかっただろう。これは、中身の影響だろうな。

「気持ち悪いからどうしてもって時以外はやめてくれ」

『そつか……それは残念』

俺の魔力は無限で純粹らしいからな。心底残念そうにラピスが言った。

ドラゴンは魔力を食べ、代わりに精霊を吐き出す。聞いてはいたが、すごく不思議な光景だった。

『ふう〜食った食った』

人間臭く（元は人間だが）言ったカーマインの周りを赤い光が飛び交っている。これが下位精霊だ。初めて見えたのはレーゼに来て

一週間後で、幻覚を見ているのかと思ったものだ。精霊はいつ見ても神秘的で美しいと思う。

『あれ、これって風属性の精霊だよな』

赤と青に混じった緑の光を見つけ、ラピスが言った。

「お前らの兄弟も生まれたのかもな」

十中八九そうだろう。

『そつかあ。風属性だから、風に乗って来たのかな。土は動きそうにないもんね』

いつの間にか白や黒の光も集まって来て、それは幻想的な光景だった。もしかするとドラゴンを見た時や魔法を使った時よりも、異世界だと実感したかもしれない。

『あ、私達の方が少し早かったんだね』

『あと二頭は弟みたいやな』

二頭が口々に言ったので、俺は首を傾げた。テレパシーのようなものだろうか？

『風がな、運んで来てくれたんよ。兄弟の声を』

カーマインはうれしそうだった。きつと、風属性のドラゴンが魔法を使ったのだろう。生まれてすぐにこんな事ができるのなら、会

える日もそう遠くないかもしれない。

兄弟、か……。

俺に兄弟はいない。いや、いるのかもしれないが、俺に知る手段はない。何せ、生まれてすぐに捨てられた孤児なのだから。

それでも、俺は恵まれていたと思う。孤児院の人達は親切だったし、同じ孤児の子供達とは兄弟同然に育った。友達もできたし、親友と言える人もいた。だけど、家族はいない。両親はもちろん、本当の意味での兄弟は、いない。

同じ境遇の仲間である孤児院の子供は、やっぱり他人だった。兄弟のように育っても、友達より中が良くても、どこか遠慮があった。

『あ、そうや』

カーマインの声に俺は我に帰り、ぶんぶんと頭を振った。考えても仕方がない事だ。

『ウィリア、契約せえへん？』

「契約？」

『いいね、それ。しょうよ』

二頭曰く、契約するとお互いの位置がわかるようになるし、お互いに相手を召喚できるらしい。念話もできる。よく小説などにある

主人公と幻獣なんかが結ぶ主従契約に似ているが、レーゼの契約は少し違う。主従のように上下関係はなく、双方の意志を尊重した平等なものだ。合意なしに召喚できないし、一種の約束みたいなものだ。

「神と契約って……お前らその発想がすごいな」

まともな思考の持ち主ならば、たとえ平等な契約であっても神と交わそうなどと思わないに違いない。尤も、俺は敬われてもうれしくないし、対等に扱ってくれる事ありがたいが。

『ダメかなあ？ドラゴンはレーゼで一番寿命が長いけど、それでも神ほどではないよね？大して長い時間でもないと思うんだけど』

ラピスがこちらを窺うように言った。確かに、地球^{アイノス}なんかを見ているとかなり長生きするに違いない。神は世界の管理者であり、世界そのものでもあるのだから。そしてその地球^{アイノス}でさえ、世界の中ではそんなに古くないのだ。

『それにな、契約は破棄できるんや。双方の合意の上でやけどわたしは拒否せえへんし、ラピスもそうやる』

カーマインの言葉にラピスが深く頷く。

「契約か……便利そうだし、いいかもな」

強制力はないのだから、損するものがない。プラスにしかならないのなら別にかまわないと思う。

『ほんなら、一回人型になった方がええかな』

そう言うと、カーマインは赤い髪の少年へと変化した。ラピスも同様に、青い髪の少女になる。外見年齢が七歳くらいなのは生まれただけだからだろう。将来が楽しみな容姿である。

二人は爪を鋭く変化させて自分の指をスパツと切った。

「ほい、これなめてな」

「契約には血を交換する必要があるみたい」

……なるほど、よくあるパターンだな。

俺も同じように指を切って血を交換すると、二人が口を開いた。

【我、光の古代竜エルムと闇の古代竜クロムの子であり、水の古代竜ラピスラズリ】

【同じく、火の古代竜クリムゾン】

【【我らはレーゼの神、ウイスタリアとの契約を望む】】

これは古代語だ。誰に聞いたわけでもないが、なんとなくわかる。

エルムに聞いた話だが、レーゼにおいて古代語とは精霊の言語で、魔術を使う際に必要なものだそうだ。古代語と言っても日常的に使っているのは精霊ぐらいしかない。他の生き物は最初から他の言語を使用していて、古代語は魔術にしか使われないらしいと聞いた。

ていた。

契約の誓いも古代語なのか。

妙な事に感心しながら、俺は知らないはずの古代語を口にした。

【レーゼの管理者にしてレーゼそのものであるウイスタリアは、ラピスラズリ、クリムゾン、双方との契約を承諾する】

そう言った瞬間、俺の左腕には青と赤の、ドラゴンの形をした紋章が現れた。同様に、二人の腕に銀の月が現れる。

「これで、契約完了や」

カーマインが満足そうににっこり笑って言った。

10：まだまだ子供

近くに人類はいなかったようで、俺達は五日ほど歩き回った。さすがのドラゴンも、ある程度近付かないとわからないらしい。

二頭が卵から孵って六日目の昼、カーマインが前を歩く俺の袖を引いた。

「魔力や。間違いなく人類やで。魔物ならあんなに群れたりせえへん」

二頭はどちらの体にも慣らすために、姿を一日置きに変えている。丁度ドラゴンの姿をしていたラピスは、素早く人型になった。

「人類に会った事がないからどの種族かは特定できないね」

「いや、それだけわかれば十分だ」

俺はまだ魔力を感知できないが、二人にはハッキリと感じられるようだった。彼ら曰く、極めれば個人の特定もできるはずだとか。エルムやクロム辺りはできてもおかしくないかもな。

“空の神殿 《ロアー・ジェ》” に行った時、璃寛がポロツと「神は全ての世界の能力を使う事ができる」なんて言っていた事がある。そもそも地球には魔法や超能力などないのに、璃寛は瞬間移動のようなものを使っていた。“神様だから当たり前”なんて言われればそれでしまいが……何と云えばいいのだろう。

例えば、レーゼには超能力がないが、俺の知らない異世界には存在するはずだ。行った事のないその世界の力を、俺は時間さえ経てば使う事ができる。自分の知っている世界にない力を使うというのは不思議なものだ。璃寛が力を使った時はそういうものだと思うたが、今はなんとなく違和感を感じる。自分が使う立場になったからそう思うのかもしれない。

とにかく、俺には万能とまではいかなくても強大な力があるのだ。今はまだ使えないものが大半だが、こればかりはどうしようもない。俺にできない事はラピスやカーマインに頼るしかないだろう。ただ、レーゼを安定させる方法が見つかったとしても自分の力不足でどうにもできない可能性が高い事には若干の焦りを感じていた。

俺は好き好んで神になったわけじゃない。死んだ後ぐらい、ゆっくりさせてほしいというのが本音だった。しかし、どういう形であれ責任のある立場に立ってしまったのは確かだ。俺がいなければレーゼだけでなく全ての世界が今以上に危険にさらされるというし、実際レーゼでも地球でも災害が多くなっているのを身をもって知っている。そんな状況で駄々をこねるほど、俺は自分勝手になりたくなかった。

しばらくレーゼで暮らして、それなりにこの世界への愛着がわいてきた。それに、自分に良くしてくれたドラゴン達のいるレーゼを放っておこうとは思わない。

俺は十八歳くらいの外見をしているし、現在進行形で（人間ではありえないスピードで）成長しているようだが、中身はたった十五歳のガキである。自分で言うのもなんだが、聡い子供だったので人間の醜い部分を散々見たし、どういう事なのか理解できた。だから

かもしれないが、よく「落ち着いている」だの「大人っぽい」だの言われていた。妙に達観した、ガキらしくないガキだった。

しかし、俺だってまだまだ子供である。日本人の“長い物には巻かれよ”精神でこうなったが、不満がないわけではない。細かい事を言えばキリがないけれども、一番の不満は“不老不死”だった。俺はまだ神になったばかりだし、“狂うほどの孤独”とやらがどんなものなのか、本当の意味では理解できない。何より、現実感がなさすぎて神と言われても今一ピンと来ないのだ。

俺が“不老不死”に不満を抱く理由は単純だ。

俺の美学に反するから。ただそれだけ。

俺の美学とは“花は散るからこそ美しい”。つまり、“諸行無常”の考えである。別に仏教徒だというわけでもないのだが、日本古来の考え方が好きだった。

生きている以上、いつかは死ぬ。だからこそ生きる事が楽しく、辛いのだ。

絶対に死なないとわかっていて、どうして精一杯生きれようか。どうしたって“死なない”事に対する甘えが出てくる。そうすると全力で何かをする事も減って行き、最後には生きながら死んでいるような地獄が待っているに違いない。恐らく、これは“狂うほどの孤独”に近いものだと思う。そんな人生を、誰が歩みたいと思うだろうか。

世の中汚いものだらけだって知っているくせに、“美学”なんていうもので物事を考える辺り、俺はまだまだ子供^{ガキ}なんだろう。

「ウィリア？どないしたん、ボーっとして」

心配そうに覗き込む二人の子供に、何でもないと苦笑して頭を撫でた。二人共精神年齢は子供ではなく、下手をすれば俺よりも上のはずだが、気持ち良さそうに目を細めた。

「そういえば、ドラゴンって寿命どれぐらいなんだ？」

「んー、古代竜だと三千年くらいかな？」

「地竜とか翼竜やったら二千年か……長いねんなあ」

という事は、何事もなければ三千年間会いたい時に会えるというわけか。

俺は結構警戒心が強く、こう見えても人見知りする方だ。こいつらが平気なのは、エルムやクロム同様裏表がないからかもしれない。転生者というのもあるだろうが。

村らしき場所までには後一日分くらいの距離があるらしく、俺は今の内に言っておくべきか、と口を開いた。

「一応、お前らに言っておきたいんだけど」

俺が言つと、二人は先を促すようにこちらを見た。

「俺、たぶん演技すると思うけど、顔に出すなよ？」

「演技？」

なぜ、と問われて、どう答えるべきか少し迷う。

「うーん、俺にとってはお前らが異常なだけだな。自分の事ながら、初対面で警戒を解くとは」

地球では誰にも
アイノス
友や親戚にさえ素を見せなかったというのに。

「まあ、半分警戒、半分癖つてところだな。その時々によって変わるだろうが、俺の演技は完璧だから狼狽えるなよ」

俺は全く違う人物になりきる事ができる。一番の特技と断言している。……身に付けた経緯が経緯なので胸を張って言う気にはなれないが。

俺の様子を見て、何か事情があると悟ったのだろう。二人は何も言わずに頷いた。

うん、賢い奴と話すのは気が楽で好きだ。

二人に話したのはこっちが素だって知っておいてほしかったからだが、言わなくてもわかってくれたかもしれない。

ヤバイ。前世で信頼できる人がいなかった身としてはすごく嬉しい。

顔が緩むのを止める事ができなかった。

……見られてなかったらいいけど。

S i d e S t o r y : 贈り物 (前書き)

とある神様視点です。

Side Story: 贈り物

新しくできた世界、レーゼに神が生まれたという。正確には“神として生まれ変わった”のだが、細かい事は気にしないでもらいたい。

さて、その知らせを聞いて、早速贈り物してみた。どうやら、キヤリスの奴も同じ事をしたようだ。示しあわせたわけでもないのに、やっぱり考える事が同じだな。

レーゼを管理する事になった、新しい神。どういう人物なのか、今から楽しみである。あそこは今荒れているから、管理するのも大変だろう。立場上力を貸す事はできないが、知恵を貸してやってもいいと思う。……もし気に入ったならば。

あー、しまったな。

時間の流れが違ってたのは面倒な事だ。昼間に来るつもりだったのに、夜中になってしまった。また出直すべきか。しかし、彼がいる場所はここからそう遠くないのだよ。どうやら起こしてしまった

ようだし。

神に選ばれるだけはあるな。まだ魔力はわからないだろうから、気配を読んだのだろう。わざわざ消したりしてないしな。

あ、こっちに近付いている？それほど警戒していない様子だし、私が神だって事はほぼ確信しているようだ。あと二つ気配があるが、片方は覚えのあるものだった。無事合流したようだ。

レーゼの神は、神名をウイスタリアというらしい。それはもうこの世のものとは思えないほどの美形だとか。

後は……何て聞いたかな。まあ、会えばわかるだろう。

結論から言わせてもらうと、ありえないほどの美人だった。これで男というのが信じられない。外見などは然程気にしていないが、女としては少しへこむ。

木々の間から現れた彼を、まじまじと見てしまった。ウイスタリアは遠慮がちに言う。

「えーっと神様、だよな？」

おっと、不躰だったかな。声も男にしては高く、ますます女の間違いなんじゃないかって思ってしまう。絶対に言わないが。

「いかにも。お前が新しくレーゼを担当する事になったウイスタリアだろう？」

「ああ」

私としては美人よりかわいい方が好みだが、まあ美しいものとか
きれいなものは嫌いじゃない。とりあえず外見は合格かな？

「あ、ナデシコ様」

ウイスタリアの後にいた少女が言った。容姿に覚えは全くないが、
魂には覚えがある。

「知り合いなん？」

「私の世界の神様なんだけど……」

少女がちらつとこちらを見た。その顔にはどうしてここにいるの
か、という疑問がわかりやすく書かれている。

「お久しぶりです、ナデシコ様」

「ああ、久しぶり。今の名前は何ていうんだ？」

「ラピスです。こっちはカーマイン」

ラピスの言葉に、カーマインがぺこつと頭を下げる。

「キャリオのところのやつか」

「はい。キャリオ様とお知り合いなんですか？」

「まあな」

キャラオ 本名はキャリスという あいつとは一言
で言うには難しい関係だ。親友、とも言えるのかもしれないが、少し
違う気もする。もちろん恋人でもない。

「それはそうと、お前ら一旦外してもらえないか。今回用があるのはこっちなんでね」

ウイスタリアの方に目を向けると、ラピスが心得たように頷いた。
カーマインは疑問符を浮かべているが、まあ問題ないだろう。

「初めまして、新入り君。私は木蓮^{モクレン}。神名^{しんめい}はラピスも言った通り撫^{ナデ}
子^{シコ}だ」

「千歳^{しんめい}だ。神名^{しんめい}は わかっていると思うがウイスタリア。ラピ
ス達にはウイリアと呼ばれている」

ふむ。声もなかなか美しい。

「ラピスのいた世界の神、で間違いないか？」

「ああ。私からの贈り物^{プレゼント}は気に入ってくれたかい？」

「プレゼント？」

不思議そうに首を傾げる。一々仕草が上品だ。本人はそんなつもりなどないのだろうか。

「ラピスだよ。知らない世界へ飛ばされ、神なんてものにされて、不安だろう？たとえ同じ世界でなくても転生者がいると気分が違う。カーマインも、きつと同じ理由で送られたのだろうな」

私も始めは苦労したものだ。ほぼ無敵状態であつても神としての力なんてほとんど使えないし、味方なんて誰一人いない。ましてや、私のいた世界なんて神を信じる者はいなかった。否、私を神だと信じる者がいなかったのだ。人間しかないから。

「うん、まあそうだな。確かに気が楽だ。無駄に畏まる事もないし」

「ははは、私が選んだ者だからな」

堅苦しいのを選ぶはずがない。

「そついや質問があるんだが、いいか？」

「ん？そうだな。かまわんど。お前は中々面白そうだ」

特に外見と中身（話し方）のギャップがな。……言わないが。

「えーと、まず聞きたいのはレーゼの分類は何なのかって事だ」

「レーゼの分類？それなら現時点でわかっている事を話してもらえないか」

千歳はレーゼについてドラゴンに聞いたらしい話を細かく話して

くれた。魔法などもあるようだが、これは恐らく……

「“種族の世界”だな」

「種族？」

「つまりは多様な種族が住む世界ってわけだ。人間、魔人、天人、竜人、獣人、エルフ、ダークエルフ、ドワーフ、妖精。全部で九種族だな。更に魔物と精霊。これだけあれば確実だろう。私の知っている“種族の世界”は六種族だったし」

分類つてのは一つじゃないから“魔法の世界”とかも含まれる可能性はある。途中で変わったりもするが、現時点で確実に言えるのは“種族の世界”だけだ。

「じゃあ、“進化の世界”ってのは何なんだ？レーゼは宇宙から始まったわけじゃないから“進化の世界”でないのはわかる。それなら、文化や技術なんかは絶対変わらないのか？」

「ん？璃寛から聞いたのか？“進化の世界”以外の世界は、ある一定以上進化しないってだけで変わったりはするぞ。そうでないところまらないだろう？もちろん退化もありうる。……というか、ある一定に達したらそのままキープか退化しかないな」

ちなみに私の世界は“進化の世界”ではない。成長しては退化し、その繰り返しだ。

「成程」

「ま、少なくとも国ができてある程度裕福な暮らしができるように

はなるだろう。それから後は私にも、シャモアにも全く予想がつかないな」

転生者などによって変革がもたらせる事もある。当然の事ながら、その世界の“天才”が鍵となる事も。

「最後に、これが一番聞きたい事なんだが
世界を安定させ
る方法はないか？」

千歳の質問に、私は気を引き締めて口を開いた。

改稿します

お久しぶりです。紅このはです。

今回、実に5ヶ月もの間放置してしまつて申し訳ありません。この度は、「レーゼの神」及び他の作品も全て改稿しようと思います。

やはり、いくつもの小説を一度に連載するのは無謀すぎたという事でしょう。もしかすると、いくつかの小説は消すかもしれません。

「レーゼの神」は多少手直しする程度で、話が大きく変わるわけではありません。ほとんど誤字脱字の修正と矛盾点の訂正のみです。

もし読みたいと思つてくださっている方がいらつしゃれば、お手数おかけしますが「レーゼの神（改）」の方を登録し直してください。

なお、「レーゼの神（改）」が「レーゼの神」に追いついた時点で「レーゼの神」は削除します。

ご迷惑をおかけしますが、よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2773q/>

レーゼの神

2011年12月21日17時52分発行